

第二部 神と人間

問10 神とか仏とかいうものは、みんな人間が作り出したのではないでしようか。

答 神とか仏とかいうものは、みな、人間が苦しい時に、こんなことをしてくる力あるだけかがいたらいいなあと空想した願望、欲求不満が造り出した仮空の存在にすぎない、とある人はいいいます。こうした宗教批判は今に始まったことではなく、ギリシャの昔からあったもので、哲学者クセノファネスは「エチオピア人の信じる神は色が黒く、鼻がしし鼻で、馬が考えたら神は馬の形をしているだろう」といつて当時の人々の神信仰を皮肉ったのでした。

さて、この批判はあらゆる偶像礼拝にびったりあてはまる原理です。人々はたしかに自分のつごうや幸福への欲求を中心にしてそれをみたくれるような神を想定してこれに祈ります。このような神は実は人間が自分の考えを実現するために創作した神であり、そこでは主人は人間であつて、神はそのしもべというわけです。人間は自分の欲求のためにこのような神をもち、宗教をもとうとします。しかし、このような人間中心の神は、どんなにあつく信心されようとも神ではなく人間の作った偶像にすぎません。

まことの神とは、人間が自分のつごうを中心にして造り出したものではなく、まったく人間をこえたところから、あらわれてくる絶対他者であります。彼は人間に左右されない自由な意志をもち、正義と愛をもって人間に臨み、常に自己中心的なわたしたちのあり方を退け、神のみ旨にしたがってきよく生きることを求める聖なるおかたであって、まさに、ここでは神は主であって人間は従であります。このような神は人間が考え出した神ではありません。

この神がイエス・キリストを通して人類に啓示されたのです。そしてそれによっていっさいの人間の考え出した神神は空しい偶像として砕かれてしまいました。わたしたちは今こそまことの神の前にひざまずかねばなりません。(出エジプト三二・一―三五、使徒一七・二二―三二、ローマ一・一八―二五)

問11 神は天地の創造主といわれますが、それはどういうことですか。

答 神はこの世も人間もまだ存在していなかった永遠のはじめからおられました。ひとりです。いますことを欲せず、人間をかしらとして天地自然すべてのものをつくられて祝福されました。

このことは第一に、この世にあるものはすべて存在の意味と目的をもっておいて、無用のものは何一つとしてないということの意味しています。なぜなら、それらは偶然や単なる自然法則によって生まれたものではなく、永遠なる神の意志によって生じたものだからです。

そして第二にこのことは、神はすべてのものの創造主であって、天地にあるいっさいは被造物であり、この二つの間には混同したり、同化したりすることのできない質的な違いがあるということの意味しています。神はこの世にあるいかなるものとも区別されています。彼はいっさいをこえ、いっさいに対して絶対主権をもっておられます。ですから、わたしたちは被造物の中の何かを、たとえどんなに力あるものであってもそれを絶対化して、神にしてはなりません。それは偶像を造ることで神への犯罪です。被造物はすべて有限であり、相対的です。無限であって絶対的なものはひとり創造主なる神のみであります。（創世記一・一一三一、ローマ一・一八―二五、問67参照）

問12 神は見えない神であるといわれますが、見えないのに存在しているといえるのでしょうか。

答 この世にあるものはすべて人間の感覚や理性などの認識能力によって把握することができません。またはその可能性がありません。

しかし、すでにのべたように神は被造物の一種ではありません。ですから、その存在のすがたもまた被造物とちがっております。つまり、神は見ることでできないかたとして存在されるのです。見えるものは神ではありません。被造物の一種です。わたしたちは神を見ることはできません。理性でとらえたり、理性に納得のゆくように説明することもできません。しかし、聖書を通して与えられる不思議なしめしによって、このかくれた神の生ける實在にふれることがゆるされるのです。これが信仰なのです。（ヨハネ四・二三―二四、問24参照）

問13 神道という神とキリスト教という神とはどちらがいますか。

答 日本でいう神とは上^{かみ}であり、日本人は古来少しでもすぐれたものならばなんでもこれを「かみ」として尊敬し、あがめ、まつってきました。たとえば太陽は人間に何か優越したものをもっているような印象をあたえましたので、これに天照大神という名をつけて拝みました。また、火、雷、風、その他自然物や自然現象を何でも神としてまつたのです。また、人間で

も、なにかある点ですぐれていると、その英雄、偉人、天才、主君、また先祖を神にしました。

このように神道でいう神とは、いわば、自然や人間の中にある一つのすぐれた力を意味しているわけです。ですから、ここでは神と人間の差別も相対的の差であって絶対的のものではなく、したがって神も唯一つでなく八百万やおよその神といわれるほど多くて、多神教であります。ゆえに神道では、キリスト教でいうようなこの世をこえた絶対他者の存在を知っていないといわねばなりません。

キリスト教でいう神はすでにのべたように、いつさいの被造物から絶対的に区別された創造主であって、したがって唯一神であり、この神とならぶことのできるものは一つもありません。わたしたちは自然や英雄、偉人、天才、先祖も尊敬し、しばしば畏敬を覚えることもありますが、それは神に対するような畏敬ではなく、すぐれた被造物への尊敬であって決して混同してはなりません。

問14 神が唯一であるとはどういうことですか。

答 第一に、神は被造物をこえた絶対者であつて、他のものを神とすることを禁ずるといふことを意味しています。(問11及67参照)

第二に、神は人間との誠実な人格的交わりを求めておられるということを意味しています。ちようど、夫や妻をひとりしか持たないということが、夫婦間の眞の愛と信頼にもとづく人格関係であるように、神と人間の関係も、人間がひとりの神と結ばれ、よい時だけでなく、悪い時にもこの神から離れず、愛と信頼をもつて最後まで信じ、従つてゆく一貫した信仰のあり方をしなければなりません。

お正月には神社にまいり、お盆にはお寺にまいるといふような多神教的宗教生活では、たとえどんなに美しい習慣のようであっても、それは宗教的節操のないあり方であるだけでなく、そこでは誠実な人格的交わりというものが、まったく欠如しているのです。

このような宗教のもとでは人間と人間との関係も人格的でなくなり、したがつて眞のモラルを築きあげることとはできません。(ヨハネ四・一六―二四)

問15 神を「天の父」とよびますが、なぜですか。

答 創造主なる神が、単に創造主としてでなく、同時に「父」としてわたしたちに臨み、わ

たしたちを「子」とよび、父と子の親しい交わりを結ぼうとされるからです。

わたしたちは神によって善に造られたにもかかわらず、神から離れ、罪におちいった者ですが、神はこのようなたしたちを捨てることなく、それどころか神の子として迎え、子に対するような愛を注ぎ、神のもとにあるすべての宝をあたえようとされます。わたしたちはこのようなめぐみ深い神のこころをイエス・キリストによって知らされて、心から神を「アバ父よ」（ガラテヤ四・六、ローマ八・一五）—アバとはアラム語で父の意—とよびまつるのです。

こうして、わたしたちと神との間は、もはや他人ではなく、また支配者と被支配者の隷属関係でなく、父と子の人格関係であります。もちろん、神は時には、父らしい威厳と怒りところしめをもって臨まれることもありませんが、神はすべてを父らしい考えからなさいます。また、神は父として全人類の上に臨んでおられるのですから、世界はこの父のもとに一家族とならねばなりません。（問55参照）

問16 神はわたしたち人間にどんないましめをあたえておられますか。

答 神は人間を他の被造物よりもすぐれた万物の霊長とし、「神のかたち」として造られました

た（創世記一・二七）。それは人間がこの世界を創造の目的に従っておさめ、神の栄光をあらわすようにとのみ旨によるものであります。

そのために神は十戒をあたえられました。これを要約すると次の二つになります。

第一は「心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくし、主なるあなたの神を愛せよ」（申命記六・五）ということであり、第二は「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」（レビ記一九・一八）ということでもあります。（出エジプト記二〇・一―七、申命記五・六―二一、ルカ一〇・二七、問66以下参照）

問17 罪とはどういうことですか。

答 神は人間に二つの戒めをあたえ、万物の霊長らしく生きることが求められました。その二つの戒めとは、万物にまさって神を愛し、また隣り人を愛せよということでした。

ところが、わたしたち人間の考えていること、していることはどうでしょうか。すべて、このいましめの精神に反し、まったく自分だけを愛するというエゴイズムを根本としています。人に親切をするのも、神を信仰するのも、結局は自分のため。自分のためにならないことは、

何事もしたがらない。自分のためには友人でも犠牲にする。こういう恐しい自己中心性をもっています。

また、さらに、自分を正しいと主張し、よく思われようとする意識から離れることができないでおります。このような自己中心、自己追求心が罪であり、それは神への反逆であります。

ですから、人間はみな罪人だ、という聖書の言葉は、人間はみな刑法上の犯罪者であるとか、道徳的に悪人であるとかいうのでなく、みな神にそむくエゴイストだという意味であります。すべての人はこのエゴイズムの罪のとりこになっており、それはもはや人間の根本的性質にまでなっているのです。人は罪を犯すから罪人なのではありません。罪人だから罪を犯すのです。この罪から自由にならねばなりません。救いとはこのことにほかならぬのです。(ローマ三・九―二四、七・七―二五、問21参照)

問18 神がこの世を造ったのならば、なぜ、この世には悪があるのですか。また、なぜ人間を罪を犯すように造ったのですか。

答 神が造られたものはすべてよいものでした。そして、その善の重要な内容として、人間に

は「自由」というものを与えられました。それは、人間を機械や奴隷のように、本人の意志なしにひとりで神に従わせるのではなく、自分の自由な、自発的な意志によって神を愛し、神に従うということをも人間に求められたからです。つまり神は最初から人間と互いに自由な人格として交わろうとされたのです。

しかし、自由には、従わないこともできるという可能性が含まれています。このような危険があるのにその自由を人間に与えられたということは、神の驚くべき信頼と真の交わりへの強い意志を示しています。ところが人間はこの神の信頼を裏切り、自由を悪用し、神にさからって罪を犯したのです。そして、その結果として、この世に悪というものをもたらしてしまいました。遺伝悪、社会悪、また自然の悪も、人間が罪を犯した結果であって、その原因と責任はまったく人間にあります。わたしたちはその責任を神に帰したり、あるいは運命や、世の中のからくりに帰したりして責任のがれをしてはなりません。まず自分がさきに神に懺悔せねばなりません。(創世記三・一―二四、ガラテヤ五・一二)

問19 では神はこの人間の罪をどのようにさばられますか。

答　まずわたしたちの罪が神の怒りをひき起こしていることを思わねばなりません。神は決していいかげんな方ではない義の神ですから、人間が神の信頼を裏切つて罪を犯し、秩序を乱し、神の造られた世界をけがしていることに対しては、怒りを覚え、その罪を罰しないではおられません。わたしたちは、罪と、それに対する審きの厳しさにについて鈍感であつてはなりません。聖書は厳正な義の観念、法の観念を教えています。

しかし、それにもかかわらず、神はこのような滅ぶべき人間を滅ぼしてしまおうとはなさらず、罪をゆるし、きよめ、人間を罪の支配から救い出そうとなさるのです。神は義であると同時に愛であります。怒りを覚えつつもそれを自らの中で越え、愛に立たれるのです。こうして神は人間の罪によって破られた交わりを回復し、完成しようとされるのです。そのことを神はイエス・キリストの十字架において示されました。（ローマー。一八、三・二一―二六、ガラテヤ三・一三、問26参照）

問20　神がこの世を支配しているのならば、悪人が榮えて善人が苦しむということがあるのは、なぜですか。

答 たしかに善人が苦しむということは、わたしたちに納得することのできないなぞです。しかし、少くとも次のように考えることができますのではないかと思います。神はこの世と人間を造られました。人間は墮落し、その結果悪がこの世にはいりました。神は深い痛みをもってしばらく悔改めを待ちつつこれを忍耐し、やがて最後の審判と救済をもたらして世を完成し「神の国」となそうとしておられます。したがって、現在は、この終末への途上にあるわけで、神の忍耐の時ということができません。ですからいまは一時悪人がさかえ、善人が苦しむという不合理もあるのです。しかしこれは永遠につづくことはありません。ですからどんな不条理の中におかれても、神を仰ぎ、信賴することがたいせつであります。

さらに、また善人が苦しむという理性ではわからないことには、もっと深い靈的な意味があります。神は強い忍耐と愛をもって、悪人が悔改めて新しくなるために、イエス・キリストにおいて代理的苦しみになわれて、罪人のためのとりなしをなさいました。善人の苦しみに、このイエス・キリストの苦しみにあずかっているという意味と、それを証しているという意味があります。ですから善人の苦しみに輝いた光があります。(ヨブ二・一〇、一九・二五―二七、イザヤ五三・五、ヘブル二・一七―一八、ペテロ第一、二・一八―二五、ピリピ一・二九)